

平成 26 年度 第 4 回連載講座 石清尾山古墳群稲荷山支群 現地見学会資料

稲荷山姫塚古墳・稲荷山北端 1 号墳

～古墳時代前期の積石塚前方後円墳の調査～



現地見学会 ココに注目

- ①稲荷山姫塚古墳の前方部と後円部の構造の違いは？
- ②稲荷山姫塚古墳の前方部と後円部の立地する地形は？
- ③稲荷山姫塚古墳と稲荷山北端 1 号墳の墳丘の立体感の違いは？

積石塚古墳見学の注意事項

- ①古墳の上では走らない。
 - ②古墳の石材は動かさない・持ち帰らない。
 - ③立ち入り禁止区域へは入らない。
 - ④火気厳禁、ゴミは持ち帰る。
- * 後世に貴重な積石塚古墳を伝えるため、見学のルールを守りましょう。

現地見学会資料 目次

1 はじめに

- (1) 石清尾山古墳群とは…………… 1
- (2) 石清尾山古墳群に関する調査…………… 3

2 石清尾山古墳群稲荷山支群の調査

- (1) 稲荷山姫塚古墳の調査成果…………… 5
- (2) 稲荷山北端1号墳の調査成果…………… 14

3 前期連載講座のまとめ

- (1) 連載講座の結果…………… 18
- (2) 連載講座の成果
—他地域の古墳との比較・検討から—…………… 18

1 はじめに

(1) 石清尾山古墳群とは

高松市街地の後背部に島状に浮かぶ石清尾山塊（峰山・稲荷山・浄願寺山の総称）には、極めて多くの古墳が存在します（図5）。特に古墳時代前期（西暦3世紀中頃～4世紀代）にかけて、「積石塚」・「積石塚古墳」と呼ばれる石積みによる墳丘構築を特徴とした古墳が連綿と築かれたことが古くから知られていました。積石塚は古墳時代前期に讃岐を中心とした地域で特徴的に見られる古墳で、強い地域性を表す墳丘構築方法であると理解されています。

石清尾山塊は、讃岐のなかでも最も多くの積石塚が集中する山塊として、全国的にも知られています。一方、古墳時代後期の終わりごろ（6世紀後葉～）には、多数の盛土円墳が築かれています。積石塚築造の断絶後、時を隔てて同じ場所が墓域として利用されたこととなります。このような特徴から、古墳時代史を考えるうえで極めて重要な遺跡であると評価され、古墳群の一部が国の史跡に指定されました。



図1 猫塚古墳 空中写真



図2 鶴尾神社4号墳 竪穴式石槨



図3 石船塚古墳 割抜式石棺

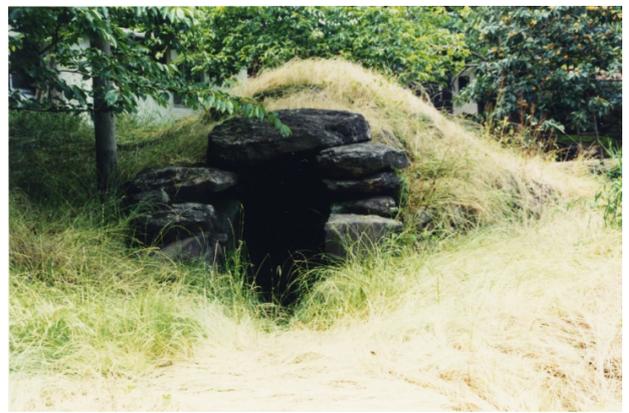
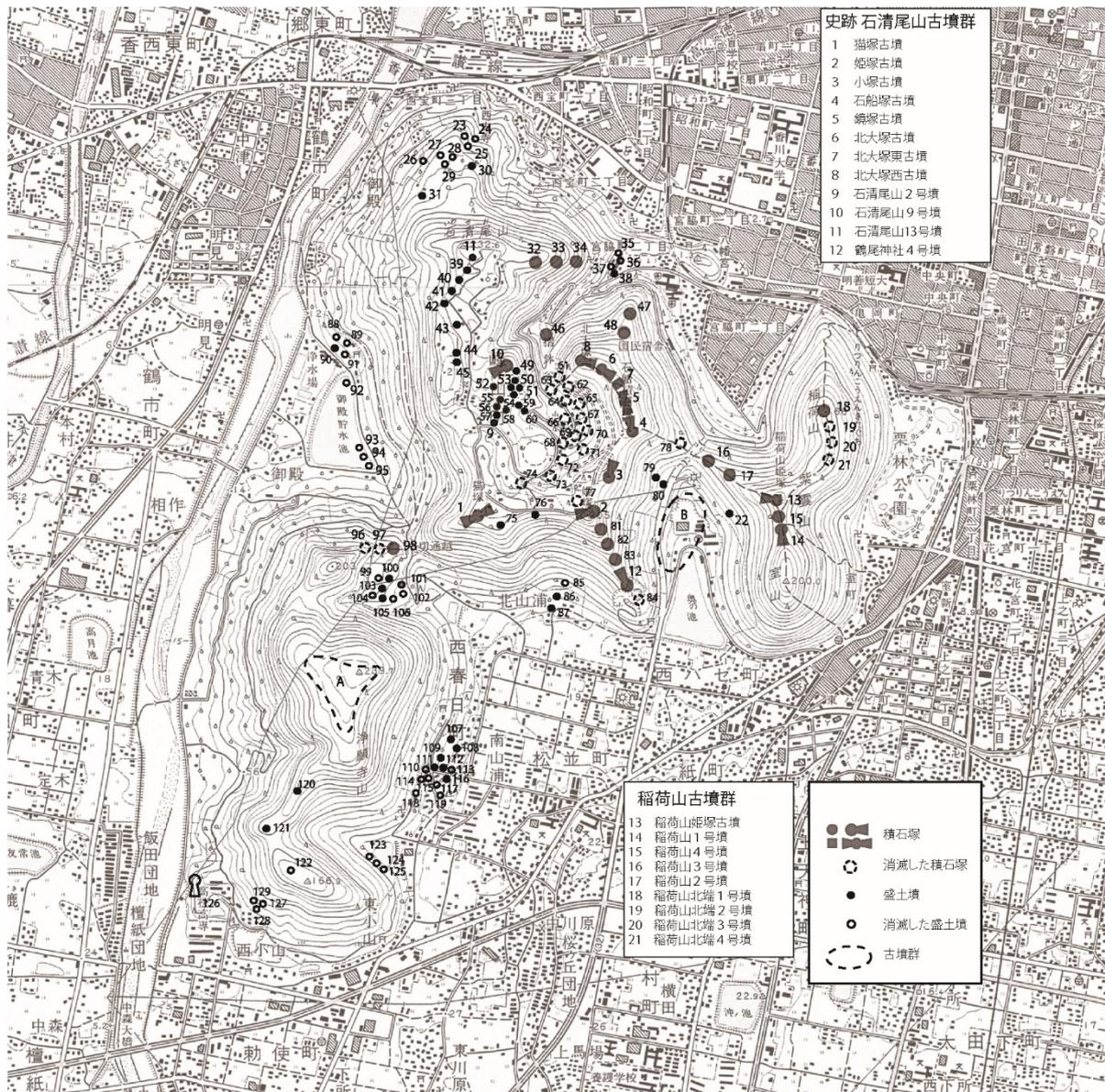


図4 石清尾山2号墳 横穴式石室



- 1 猫塚古墳 2 姫塚古墳 3 小塚古墳 4 石船塚古墳 5 鏡塚古墳 6 北大塚古墳 7 北大塚東古墳 8 北大塚西古墳
 9 石清尾山2号墳 10 石清尾山9号墳 11 石清尾山13号墳 12 鶴尾神社4号墳 13 稲荷山姫塚古墳 14 稲荷山1号墳
 15 稲荷山4号墳 16 稲荷山3号墳 17 稲荷山2号墳 18 稲荷山北端1号墳 19 稲荷山北端2号墳 20 稲荷山北端3号墳
 21 稲荷山北端4号墳 22 稲荷山5号墳 23 西方寺4号墳 24 西方寺6号墳 25 西方寺5号墳 26 木里神社2号墳 27 木里神社3号墳
 28 木里神社5号墳 29 木里神社4号墳 30 木里神社6号墳 31 木里神社1号墳 32 石清尾山14号墳 33 石清尾山15号墳
 34 石清尾山16号墳 35 峰山墓地内4号墳 36 峰山墓地内3号墳 37 峰山墓地内2号墳 38 峰山墓地内1号墳 39 石清尾山17号墳
 40 石清尾山18号墳 41 石清尾山12号墳 42 石清尾山11号墳 43 石清尾山19号墳 44 石清尾山20号墳 45 石清尾山10号墳
 46 石清尾山23号墳 47 北大塚北方2号墳 48 北大塚北方1号墳 49 摺鉢谷西斜面5号墳 50 石清尾山7号墳 51 石清尾山8号墳
 52 摺鉢谷西斜面4号墳 53 石清尾山21号墳 54 石清尾山6号墳 55 摺鉢谷西斜面3号墳 56 摺鉢谷西斜面1号墳 57 石清尾山3号墳
 58 摺鉢谷西斜面2号墳 59 石清尾山5号墳 60 石清尾山4号墳 61 摺鉢谷東斜面1号墳 62 摺鉢谷東斜面2号墳
 63 摺鉢谷東斜面3号墳 64 摺鉢谷東斜面5号墳 65 摺鉢谷東斜面4号墳 66 摺鉢谷東斜面7号墳 67 摺鉢谷東斜面6号墳
 68 摺鉢谷東斜面10号墳 69 摺鉢谷東斜面9号墳 70 摺鉢谷東斜面8号墳 71 摺鉢谷東斜面11号墳 72 摺鉢谷東斜面12号墳
 73 摺鉢谷東斜面13号墳 74 摺鉢谷東斜面15号墳 75 石清尾山22号墳 76 石清尾山1号墳 77 摺鉢谷東斜面14号墳
 78 石船塚東方古墳 79 奥ノ池4号墳 80 奥ノ池5号墳 81 鶴尾神社1号墳 82 鶴尾神社2号墳 83 鶴尾神社3号墳
 84 鶴尾神社5号墳 85 北山浦3号墳 86 北山浦1号墳 87 北山浦2号墳 88 御殿神社2号墳 89 御殿神社3号墳 90 御殿神社1号墳
 91 御殿神社4号墳 92 御殿貯水池4号墳 93 御殿貯水池1号墳 94 御殿貯水池2号墳 95 御殿貯水池3号墳 96 野山10号墳
 97 野山11号墳 98 野山3号墳 99 野山9号墳 100 野山1号墳 101 野山5号墳 102 野山6号墳 103 野山2号墳 104 野山8号墳
 105 野山4号墳 106 野山7号墳 107 南山浦12号墳 108 南山浦13号墳 109 南山浦11号墳 110 南山浦6号墳 111 南山浦9号墳
 112 南山浦10号墳 113 南山浦8号墳 114 南山浦4号墳 115 南山浦5号墳 116 南山浦7号墳 117 南山浦3号墳 118 南山浦2号墳
 119 南山浦1号墳 120 浄願寺山56号墳 121 浄願寺山57号墳 122 小山顶古墳 123 片山池1号墳 124 片山池2号墳
 125 片山池3号墳 126 がめ塚古墳 127 がめ塚2号墳 128 がめ塚3号墳 129 がめ塚4号墳
 A 浄願寺山古墳群 B 奥の池古墳群

図5 石清尾山古墳群 分布図

分布図は、国土地理院発行の25,000分の1の地形図「高松南部」を一部改変して使用

(2) 石清尾山古墳群に関する調査

a. 古墳群への注目と鶴尾神社4号墳の緊急調査

石清尾山古墳群に関する最も古い記録は、江戸時代に記された『三代物語』という文献中に見られます。この文献には「石船（一名天の岩舟）吾之を見るに人を葬る石槨に似たる可」とあり、現在の石船塚古墳の刳抜式石棺のことを指していると考えられます（図3）。その後、明治43年の猫塚古墳（図1）の盗掘をきっかけに古墳の存在が注目され、資料の紹介や踏査の記録が報告され始めます。昭和3年刊行の、香川県『史蹟名勝天然紀念物報告第3集』に古墳の分布や各古墳の特徴が紹介されました。以上の調査・報告を基礎として、昭和6年～8年に梅原末治氏を代表とする京都帝国大学による調査が実施され、その成果が昭和8年に『讃岐高松石清尾山石塚の研究』として公表されました。この調査では積石塚を主な対象として、踏査による分布図の作成、各古墳の測量図の作成と写真での記録、積石塚の構造に関する知見の整理、盗掘を含む過去の記録の収集や聞き取り調査など、石清尾山古墳群の基礎的なデータが整理されました。一方で、広大な範囲を短期間で調査したため、対象となった積石塚は表面観察と地形測量を行ったのみで、発掘調査を伴う詳細な調査は行われませんでした。このため、測量図の精度や墳丘に対する認識も今日の考古学の水準では不十分な点が認められます。

調査後、昭和9年に石船塚古墳が「石船積石塚」として石清尾山古墳群の中で最初に国史跡に指定されました。

昭和43年には、峰山における大規模な観光開発計画が持ち上がりました。開発に先立つ古墳の分布調査を高松市教育委員会（以下、市教委）が行い、昭和60年に猫塚古墳（図1）など9古墳が国史跡へ追加指定されました。

昭和56・57年には鶴尾神社4号墳（図2）の墳丘が一部崩壊したことを受け、市教委が緊急調査を実施しました。竪穴式石槨と墳丘上面を全面的に清掃する調査が行われ、墳丘構築における石材の選択的な用法や墳丘形態の特徴が明らかになりました。さらに、鶴尾神社4号墳は出土土器から最古級の前方後円墳の一つに位置づけられるなど、大きな注目を集めることとなります。鶴尾神社4号墳は、平成元年に国の史跡に追加指定されました。

b. 積石塚古墳の本格的調査の実施へ

平成22年度から、市教委と徳島文理大学文学部は石清尾山塊を対象とした古墳の分布調査及び現状確認を実施しました。その結果、稲荷山山中には史跡には指定されていないものの既指定の古墳とほぼ同時期で規模も遜色のない古墳が複数現存していることを確認しました。また、それらの古墳が周辺環境や利用状況の変化等を要因として緩やかな破壊の危機に直面していることが明らかとなり、早急な対応が必要であるとの認識に至りました。

こうした状況を踏まえ、市教委では平成24年度より稲荷山山中に所在する3基の積石塚（稲荷山姫塚古墳・稲荷山北端1号墳・稲荷山1号墳）を史跡「石清尾山古墳群」へ追加指定することを目指し、調査することとしました。最初に調査に着手したのが今回現地を公開する稲荷山姫塚古墳です。

なお、稲荷山の3基の古墳の調査と併行して、市教委では石清尾山塊の全山的な測量を実施しました。これは、石清尾山に所在する古墳を後世に守り伝えていくため、各古墳がどのような地形に立地しているのか、古墳の周辺にどのような施設や登山道などが位置するのかなど、古墳の維持・管理・活用を行うための基礎データの収集が目的です。平成25年度にヘリレーザー計測、平成26年度に測量図化業務を行い、詳細な地形測量図が完成しました（図6）。

石清尾山古墳群ヘリレーザー測量図化業務 赤色立体地図

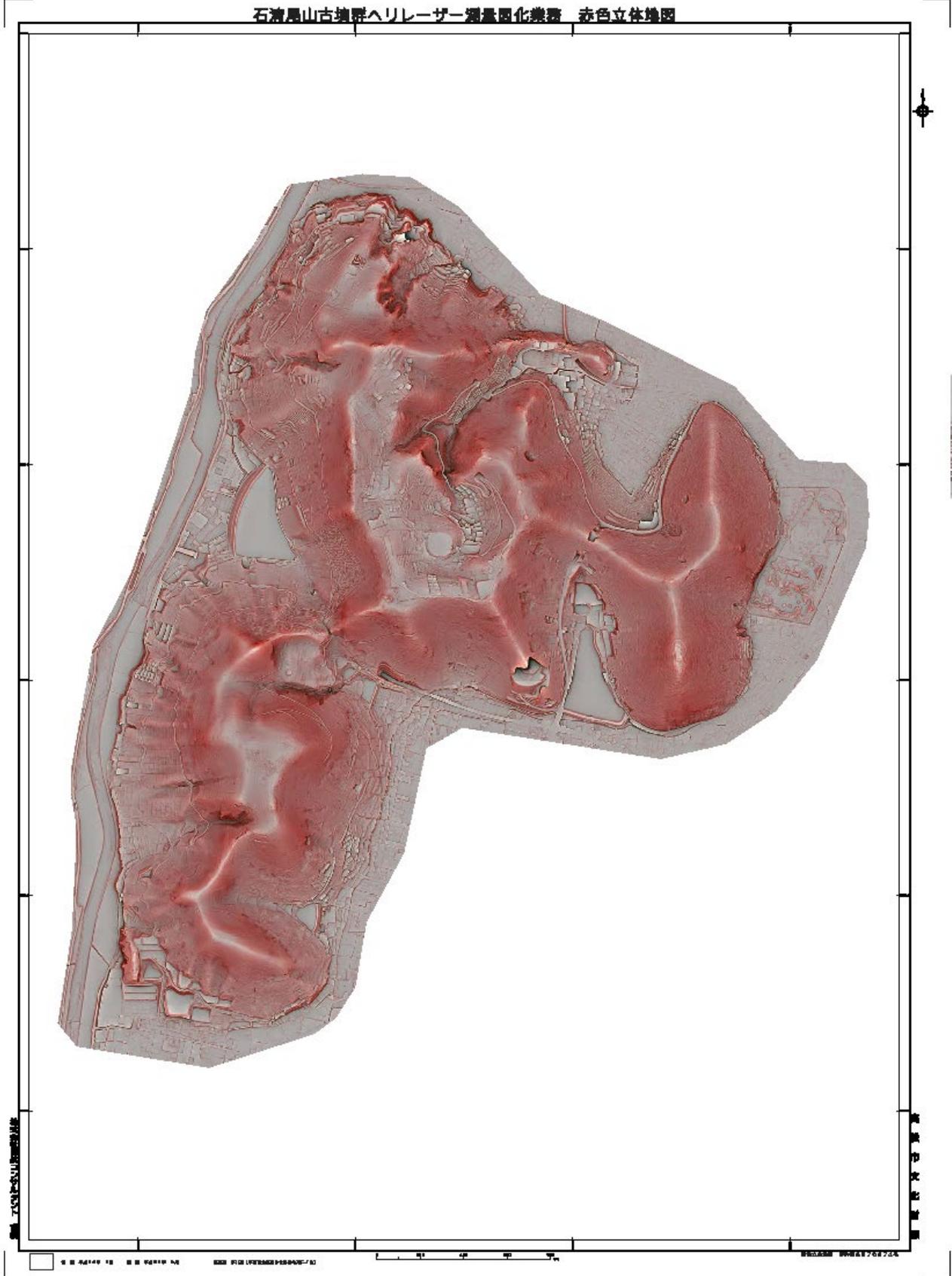


図6 石清尾山塊 三次元レーザー測量図

2 石清尾山古墳群 稲荷山支群の調査

(1) 稲荷山姫塚古墳の調査成果

a. 稲荷山姫塚古墳の既往の調査

稲荷山姫塚古墳について初めて本格的な報告を行ったのは、笠井信也氏です。笠井氏は大正5年に稲荷山姫塚古墳を含む石清尾山古墳群の踏査を行い、積み石の分類を行ったうえで、稲荷山姫塚古墳については、前方部に3段の石垣状の築石が存在することを指摘しています。

昭和6～8年には梅原末治氏を代表とする京都帝国大学による墳丘の測量図作成や観察等が行われ、その成果が昭和8年に『讃岐高松石清尾山石塚の研究』として公表されます(図7)。この報告では、石の積み方や岩盤との関係など墳丘の構築方法にも言及しており、今日においても一級品の基礎データと言えます。

昭和47年度には、市教委が浄願寺山・稲荷山古墳群の分布調査を実施し、京都帝国大学による調査以降の遺跡の現状を確認しました。その結果、京都帝国大学の報告に掲載された古墳のうち、いくつかは既に存在しないことを確認しました。

平成22年度から市教委と徳島文理大学が共同で踏査を行った結果、古墳の遺存状況や崩壊の危険性を考慮したうえで調査対象の古墳を選定し、まず稲荷山姫塚古墳の調査を実施することとなりました。

b. 稲荷山姫塚古墳の測量から発掘調査までの経緯と経過(平成24年度の調査成果)

目的 稲荷山姫塚古墳の調査を行う目的は、すでに史跡に指定されている峰山の積石塚古墳と同様の価値を持つことが推定される同古墳の詳細を把握し、史跡に追加指定するためです。市教委では、稲荷山の積石塚古墳の調査を行うことで、石清尾山塊全体における古墳の状況を把握し、史跡として保存・活用していくための計画を作成する予定で、稲荷山姫塚古墳の調査は事業の第一歩として重要な意味を持ちます。

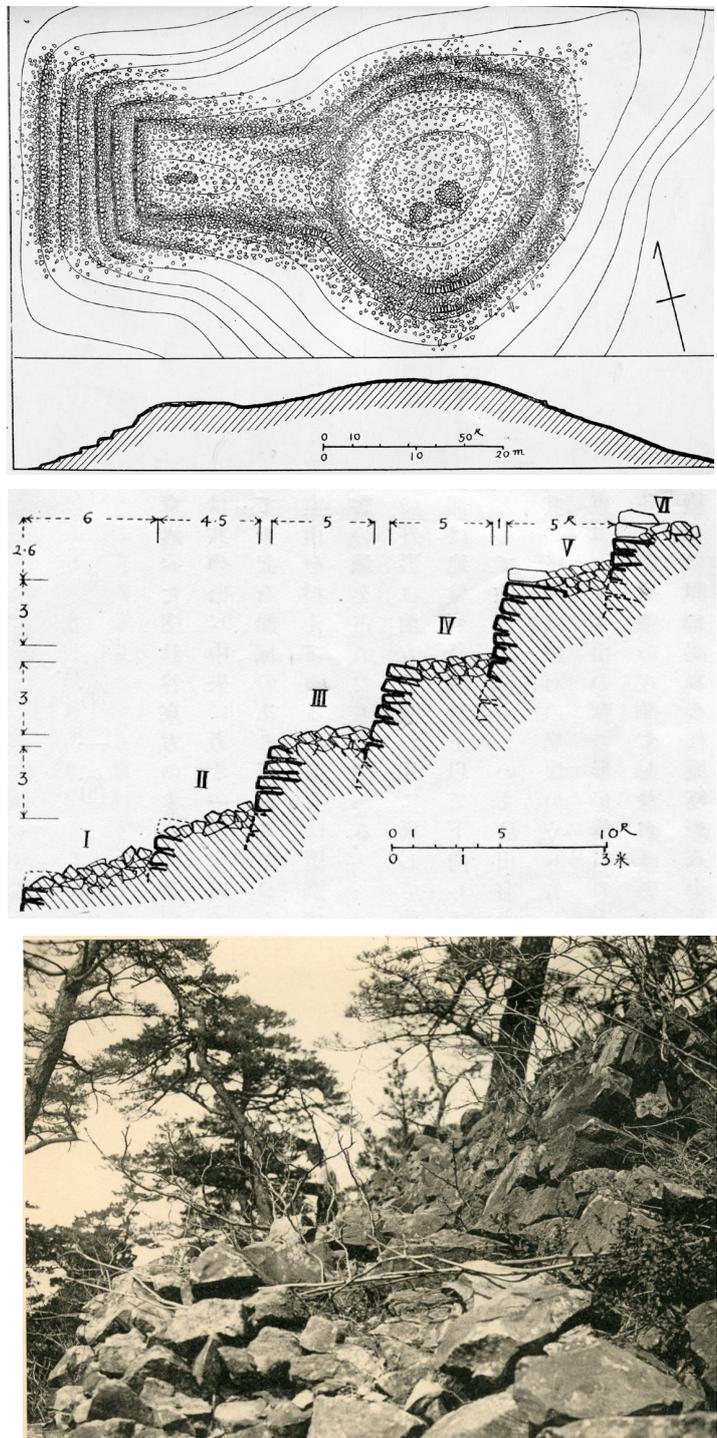


図7 京都帝国大学の調査図面・写真(京都帝国大学1933)

上段: 墳丘測量図、中段: 前方部前端断面図、下段: 前方部前端の写真

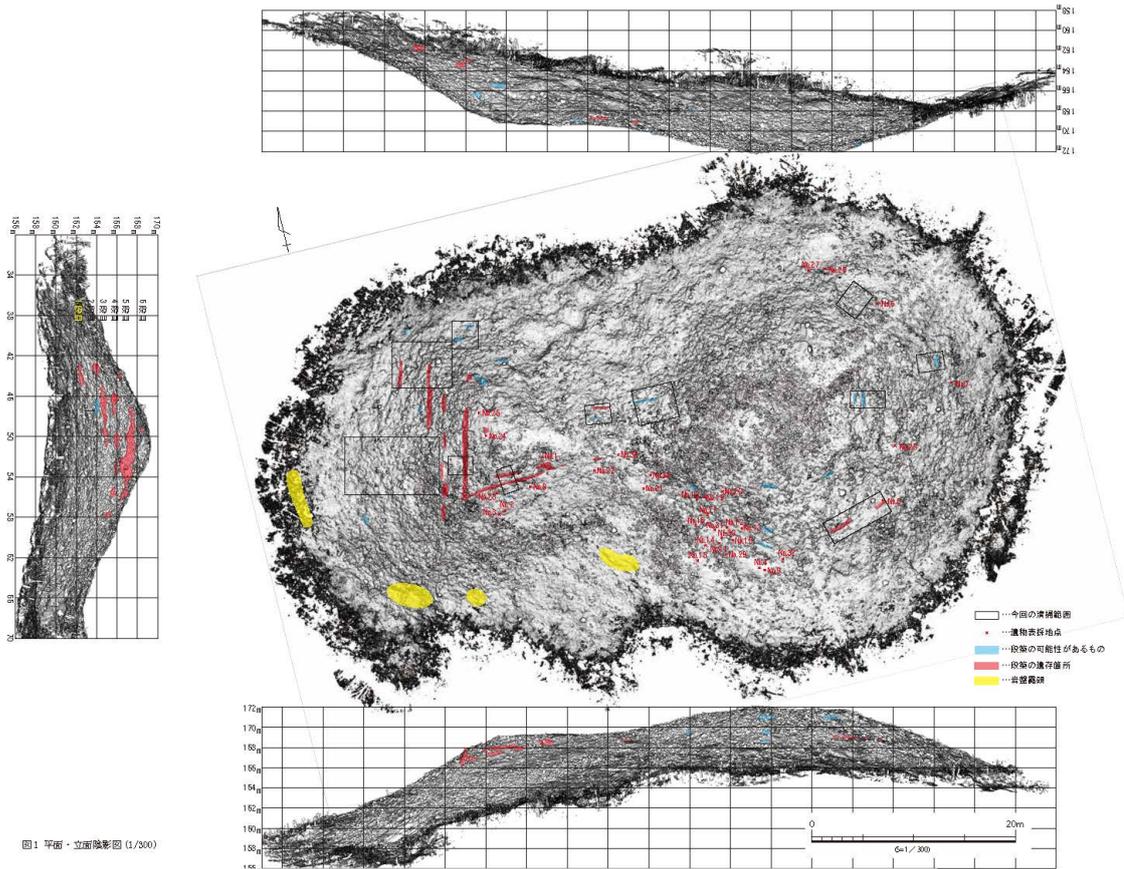


図8 稲荷山姫塚古墳三次元レーザー測量図（平成24年度測量・観察）

方法 平成24年度に古墳の現況を測量するため、三次元レーザー測量を実施しました（図8）。具体的な方法は、古墳上面を入念に清掃したうえで三次元レーザー測量を行い詳細な測量図を作成するというものです。測量後、その図面をもとに遺構の遺存状態や地形などを現地で観察し、測量図を解析した結果から分かる所見を整理すると、主に以下の5点について明らかとなりました。

- 1) 階段状の石積みが前方部前端のみでなく、各所に残存していることが判明。特に前方部南側面では段部が良好に遺存し、前方部形状が撥形を呈する可能性が高い点。
- 2) 前方部側では階段状の石積みの下方に、墳形と相似形を採らない不規則な石積みが見られる点。
- 3) 随所に地山である岩盤の露頭が確認でき、墳丘規模を推測する手掛かりとなる点。
- 4) 後円部側には明瞭な幅の広い平坦面が確認でき、墳丘本来の構造を反映している可能性が高い点。
- 5) 埴輪片など遺物の散布が比較的多い点。

以上のように、現況の観察で稲荷山姫塚古墳の多くの知見が得られた反面、古墳の正確な規模・形状・構造など、地形測量や現状の観察だけでは明らかにできない点があることも確認しました。このような経緯から、史跡への追加指定に必要な古墳の規模・形状・構造の把握を目的として、平成25年度以降に必要最小限度の発掘調査を実施することとなりました。

c. 後円部の調査成果（平成25年度の調査成果）

調査区の設定と調査方法 古墳時代前期の積石塚古墳は、これまで調査が行われたことはありましたが、トレンチを設定して詳細に記録するといった調査の蓄積はほとんどなく、調査方法が確立されていない現状にありました。このため、調査着手にあたっては、各トレンチでそれぞれの課題を設定し、戦略的

に課題を解決していくため、調査方法・手順の基準を定めました。その基準には、「どこまで」、「どのような」手順で調査するのかを細部まで記載し、調査手順のフローチャートも作成しました。また、定期的に調査状況を決められた場所から写真撮影することなど、調査経過の復元・検証の容易でない積石塚古墳の調査における原則も定めました。

平成 25 年度は、まず初年度の調査ということもあり、古墳の現況観察から多くの情報があり、かつ石材の多い前方部よりも調査の難易度が低いと考えられる後円部側に 4 本のトレンチを設定して調査しました (図 16)。

後円部の発掘調査区は、①バラス礫を含む幅広の平坦面が認められた (1・3 トレンチ)、②古墳の基礎の部分に関わる情報を得るうえで、調査区を長く設定できる (1・4 トレンチ)、③古墳の形状と全長を把握するため (4 トレンチ)、石材が露出した壁面が認められ、古墳の芯材に関わる知見を得やすい (2 トレンチ)、以上を根拠にトレンチを設定しました。さらに、墳丘部分では積み石による段構造を幅広く捉えること、他方、墳丘よりも下方では古墳の外周に人工の構造物の有無を確認することなど、部位によって課題が異なることから、調査区の幅を墳丘部分は広く、基盤は狭く設定しました。

調査成果 平成 25 年度の後円部の発掘調査では主に以下の点が明らかになりました。

- 1) 後円部の北・東・南側の 3 箇所の調査区で塊石による段構造とその前面に板石を垂直に積み上げた垂直壁 (以下、板石積み) を検出しました (図 9・13・15)。板石積みよりも下方に人工の構造物は存在せず地山の岩盤が露出した状況で、板石積みが後円部の端 (墳端) と考えられます。
- 2) 後円部の墳端は板石積みで立体的、かつ精巧に装飾している点が明らかとなりました。最も遺存する板石積みの高さは約 70 cm で、崩落した板石も多数出土したことから板石積みは本来さらに高く積み上げられていたようです。また、1 トレンチでは板石積みの上部に水平に据えられた板石とその背部に塊石が位置するという同じサイクルが 2 単位認められることから (図 10)、板石積みで装飾する段が 2 段以上存在した可能性などが推定できます。
- 3) 3 箇所で検出した板石積みの基底部の標高は、誤差 15 cm の範囲内に収まることから、後円部の造成にあたっては地山の岩盤を加工するなどの基底部を水平に加工したことが窺えます。
- 4) 後円部の直径は約 28m 程度と考えられます。
- 5) 古墳時代前期前半に帰属する多数の埴輪片などが出土しました (図 11)。遺物には、単口縁・複合口縁の壺、二重口縁、円筒ないしは器台の可能性のある破片など多様な種類があり、定形化する円筒埴輪を導入する以前の埴輪と考え

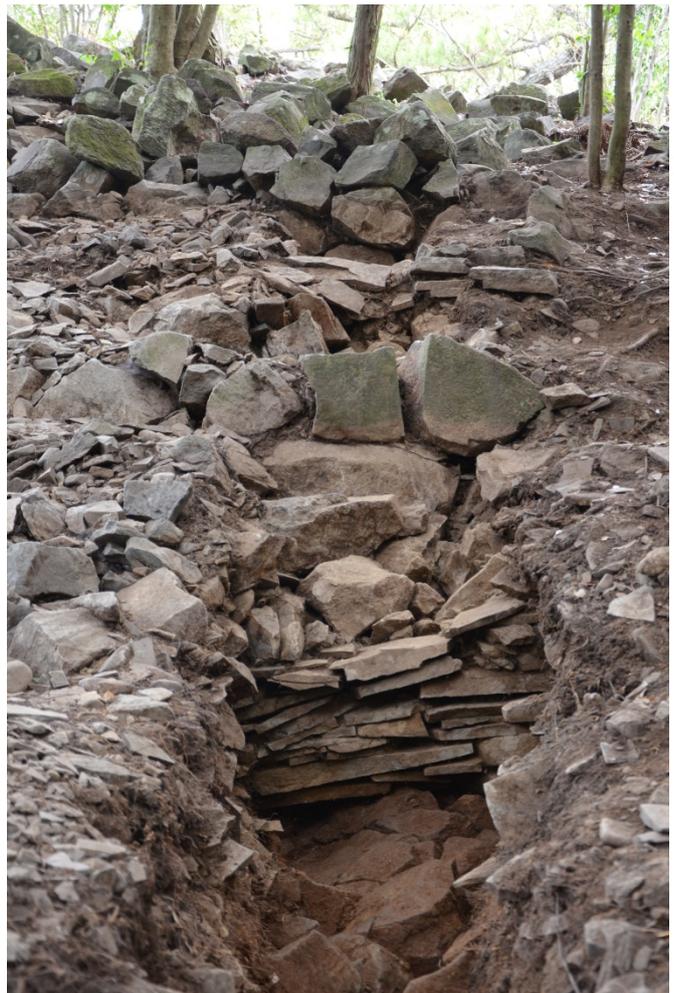
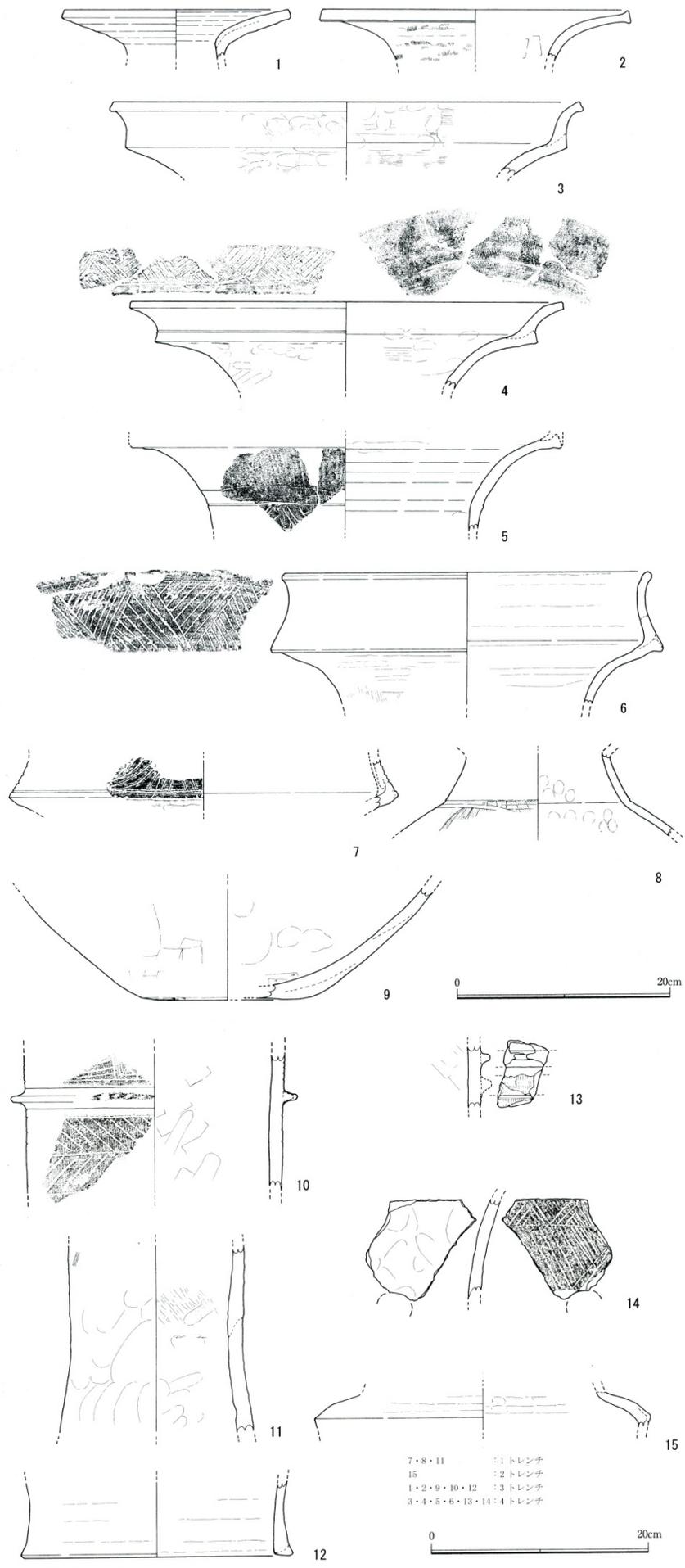


図 9 稲荷山姫塚古墳後円部南側 (1 トレンチ) 墳端 (南から)



図10 稲荷山姫塚古墳 後円部 (1トレンチ) 平面図・断面図



7・8・11 : 1トレンチ
 15 : 2トレンチ
 1・2・9・10・12 : 3トレンチ
 3・4・5・6・13・14 : 4トレンチ

図11 稲荷山姫塚古墳 後円部出土遺物 実測図



図 12 稲荷山姫塚古墳後円部北側（3トレンチ）
墳端 板石の崩落状況（北東から）



図 13 稲荷山姫塚古墳後円部北側（3トレンチ）
墳端 板石積みの状況（北東から）



図 14 稲荷山姫塚古墳後円部東側（4トレンチ）
墳端付近 岩盤直上遺物出土状況（南東から）



図 15 稲荷山姫塚古墳後円部東側（4トレンチ）
墳端の様子（南東から）

られます。鋸歯文・綾杉文など直線を基調とする文様を配した特徴的な埴輪が主体を占める点が注目されます。

d. 前方部の調査成果（今年度の調査成果）

調査区の設定 平成 25 年度に行った後円部での発掘調査の知見や方法をもとに、今年度は前方部に 3 箇所調査区を設定しました（図 16）。調査区の設定にあたっては、後円部同様、現況の観察結果から最も古墳の構造・範囲等をとらえることが可能と考えられる箇所を選定しました。

前方部南側面に設定した 5 トレンチは、上方で 2 段の塊石による段構造が存在している点、それよりも下で後円部に設定した 1・3 トレンチで見られたバラス状の礫が多数散布する傾斜変換点が存在する点、さらに下方で地山の岩盤が露出する点、以上を調査区設定の根拠にしました。前方部北側面の 7 トレンチは、石材の崩落が著しく遺存する段構造は少ないと考えられましたが、塊石が一部段状に認められた点と、5 トレンチと比較して前方部の幅を確定させるために 5 トレンチのほぼ北側に設定しました。前方部前端の 6 トレンチは、墳丘本体の構造をとらえるというよりも、当初想定していた古墳の基盤に積み上げた積み石（当初、基盤積石と仮称）の有無と、積み石が存在した場合にその構造・範囲を確認するために設定しました。

以上のトレンチのうち、まず、現状で段構造が認められるなど情報量が多い前方部南側面の調査から

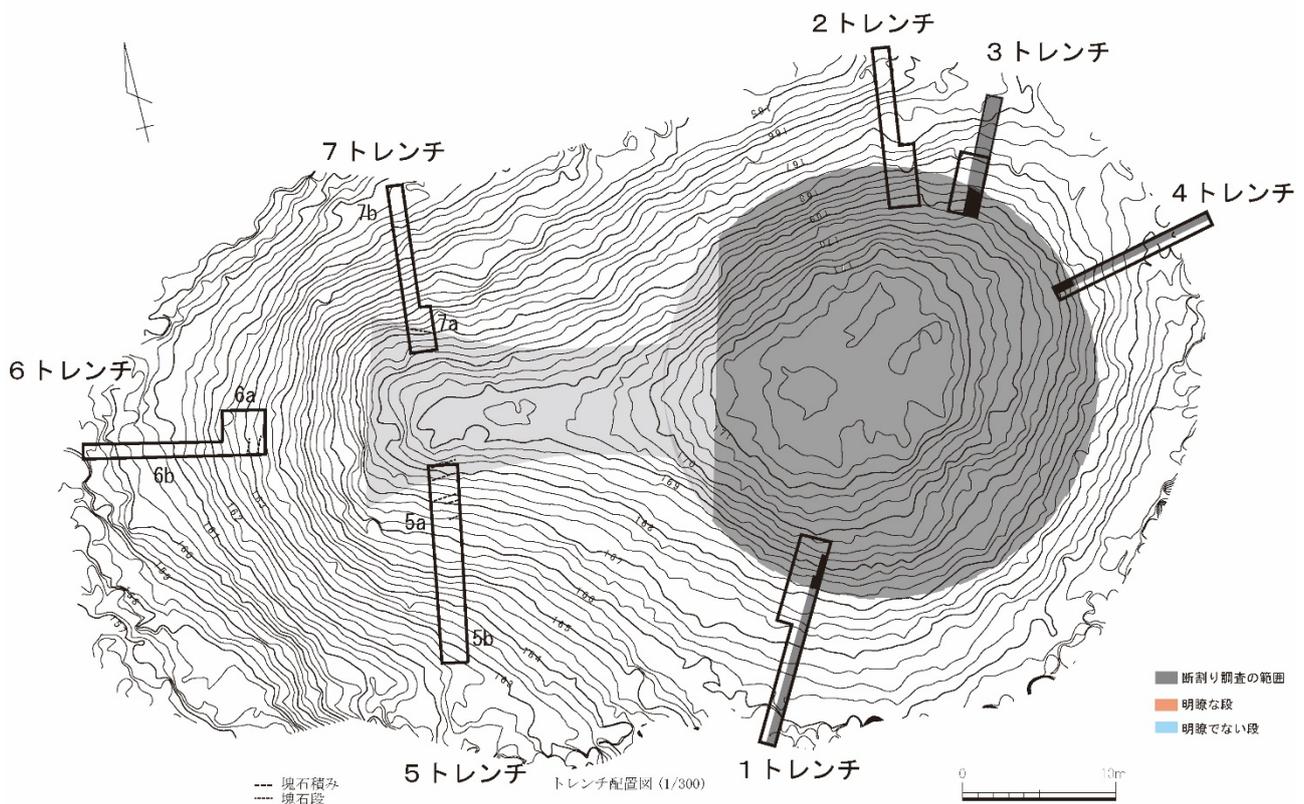


図 16 稲荷山姫塚古墳 トレンチ配置図

着手し、確認した遺構・遺物等の状況を他のトレンチの状況と比較しながら、3本のトレンチを並行して調査しました。

各調査区の概要

前方部南側面（5 トレンチ） 調査前にトレンチ上方に2段の塊石による段（以下、塊石段）が存在することが判明していましたが、調査によって、さらにその下で塊石段と板石積みを配置するという構造を2単位分検出しました。

上部の板石積みは2～3石分が積み上げられた状態で遺存し、その背後に塊石段が認められます。また、板石積みから垂直方向に南へ約1.2mの位置で、塊石段（高さ約0.6m）と板石積みが存在します（図18）。下部の板石積みは大半の石材が崩落した状態で出土しましたが、基底部付近の板石は水平に出土しており（図19）、背部の塊石段のすぐ前方に位置することから、この位置で垂直方向に積み上げられていたと考えられます。これらの段の下部の構造については現在調査中ですが、前方部墳頂の標高が約169.0m、下部の板石積みの基底部の標高が約165.6mであることから、少なくとも基盤から3.4mの高さまで石材のみを積み上げて前方部の側面を構築していたことが分かります。

下部の板石積みの下では、地山の岩盤の上に大ぶりの塊石が不規則に数石出土しました（図17）。この大きさの塊石は現在のところ上方の墳丘部分では認められないため、高さを調節するために置いた石材の可能性が考えられます。それよりも下方は地山の岩盤が露出し、遺構は存在しませんでした。

前方部北側面（7 トレンチ） トレンチの上方で塊石段を検出しました（図20）。塊石段の遺存する高



図 17 稲荷山姫塚古墳前方部南側面（5 トレンチ）
調査状況（南から）

さは約 0.9m で、その前面に塊石の平らな面を上にした石材が数石出土しました。石材の配置から、塊石段の前面に塊石で形成された平坦面が存在するものと考えられます。塊石段の基

底部の標高は約 165.5m で、南側面の下部の塊石段とほぼ同じ高さであることから、双方は対応する段と考えられます。なお、崩落した石材のなかに板石が存在したことで、トレンチのすぐ東側で多数の板石が崩落した状況で壁面に露出していることから、トレンチ内には遺存していませんでしたが前方部北側面でも板石積みを実施していたことが推定できます。

塊石段より下方は、地山の岩盤直上から大ぶりの塊石が不規則に多数出土しました。これは南側面の状況と類似しており、地盤のかさ上げのために置かれた石材の可能性が考えられます。

前方部前端（6 トレンチ） トレンチ上端で、塊石段を 2 段分検出しました。上方の塊石段に使用している石材は、いずれも平らな面を古墳の外側に向けた状態で出土しており、一部で 2 石分が遺存してい



図 18 稲荷山姫塚古墳前方部南側面（5 トレンチ）
板石出土状況（南から）



図 19 稲荷山姫塚古墳前方部南側面（5 トレンチ）
下方塊石段（南から）



図 20 稲荷山姫塚古墳前方部北側面（7 トレンチ）
塊石段（東から）

ました(図22)。なお、塊石段上の崩落石除去中に多数の板石が出土した点と5世紀末の須恵器杯身・杯蓋・壺(一部に赤色顔料付着)が5個体程度出土した点は注目されます(図21)。前者については、前方部前端でも板石を使用し古墳を装飾していたことを間接的に示します。後者については、須恵器片の断面にも顔料が付着していることから、トレンチ上方付近で破壊・顔料の塗布といった祭祀的な行為が行われた可能性が想定されます。塊石段よりも下方は、地山の岩盤が露出しており、古墳に関わる遺構は存在しませんでした。



図21 稲荷山姫塚古墳前方部前端(6トレンチ)
崩落石中 須恵器出土状況(西から)

調査成果

- ・地形的に低い前方部には、地山の上に基盤のかさ上げを行うため大ぶりの塊石を粗雑に積んでいた可能性が考えられます。
- ・前方部南側面の所見から、基盤付近に塊石段+板石積みの構造を2単位構築し、墳端付近を装飾していたことが分かりました。南側面で基底部から約3.4mの高さまで石材を積み上げていたことも分かりました。
- ・板石積みは前方部南側面のみで検出しましたが、他のトレンチでも崩落した板石が出土したため、前方部も後円部同様板石による古墳外表の装飾を行っていたと推定できます。
- ・前方部前端で塊石段を2段分検出し、それより下方では遺構が存在しないことから、この部分が古墳に関わる施設の最外周にあたることが判明しました。このことから、古墳の全長が54mより大きくならないことが確定しました。
- ・前方部前端から5世紀末の須恵器が複数個体出土したことから、この時期に前方部側で祭祀的な行為が行われていた可能性が推定されます。
- ・各トレンチから後円部と同内容の埴輪類が多数出土しました。これらの遺物は、後円部同様、古墳時代前期前半に位置づけられます。



図22 稲荷山姫塚古墳前方部前端(6トレンチ)
塊石段(西から)

調査成果(平成25・26年度の調査成果の総括)

- 1) 後円部・前方部ともに墳端付近に板石の垂直壁を構築し、精巧な造りで古墳の外表を装飾していたことが明らかとなりました。
- 2) 後円部の直径は約28m、古墳の全長は54m以内であることが判明し、不明だった古墳の規模がある程度限定できるようになりました。
- 3) 直線的な刻みを配した特異な文様構成の埴輪片など多数の遺物が出土し、当初の想定より古い古墳時代前期前半の古墳であることが明らかとなりました。また、古墳時代前期前半の石清尾山古墳群の前方後円墳の中でも最大規模の古墳であることが判明しました。

(2) 稲荷山北端 1号墳の調査成果

a. 調査前の状況と調査方法

稲荷山北端 1号墳は稲荷山の最北端に位置する積石塚古墳で、昭和 6～8 年の京都帝国大学の調査で、測量調査等が行われていました。しかし、その調査では、ややいびつな楕円形の円丘部を測量したものの(図 23)、古墳の形や構造などの詳細については不明でした。また、調査着手前の古墳には雑草が生い茂り、円丘部上に行くのも容易でなく、古墳を詳細に観察することができない状態でした。

本年度は、稲荷山北端 1号墳を測量・観察することを目的に、8月中旬より墳丘を認識できる円丘部から下草・落ち葉等の除去を中心とした清掃作業を行いました。円丘部の清掃が進むにつれ、円丘部南側に高まりがあり、一部の石材が露出していることを観察できたため、円丘部南側も清掃し石材の検出に努めました。清掃作業は約 1カ月を要して 9月末に完了し、その後、三次元レーザー測量及び測量図の解析作業(図 24・25)を行いました。

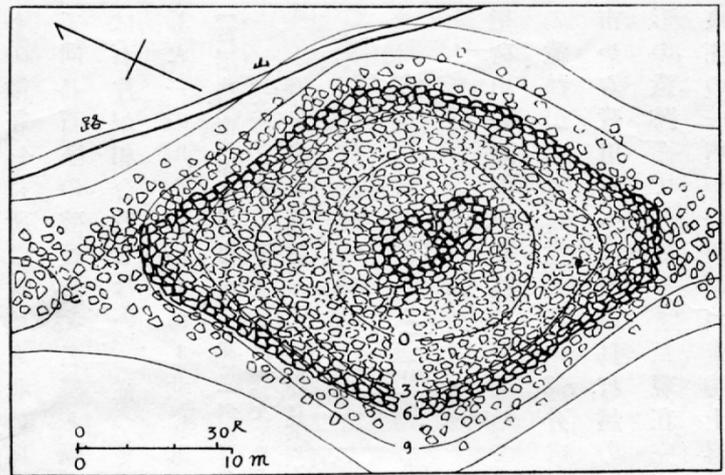


図 23 稲荷山北端 1号墳の測量図面 (京都帝国大学 1933)

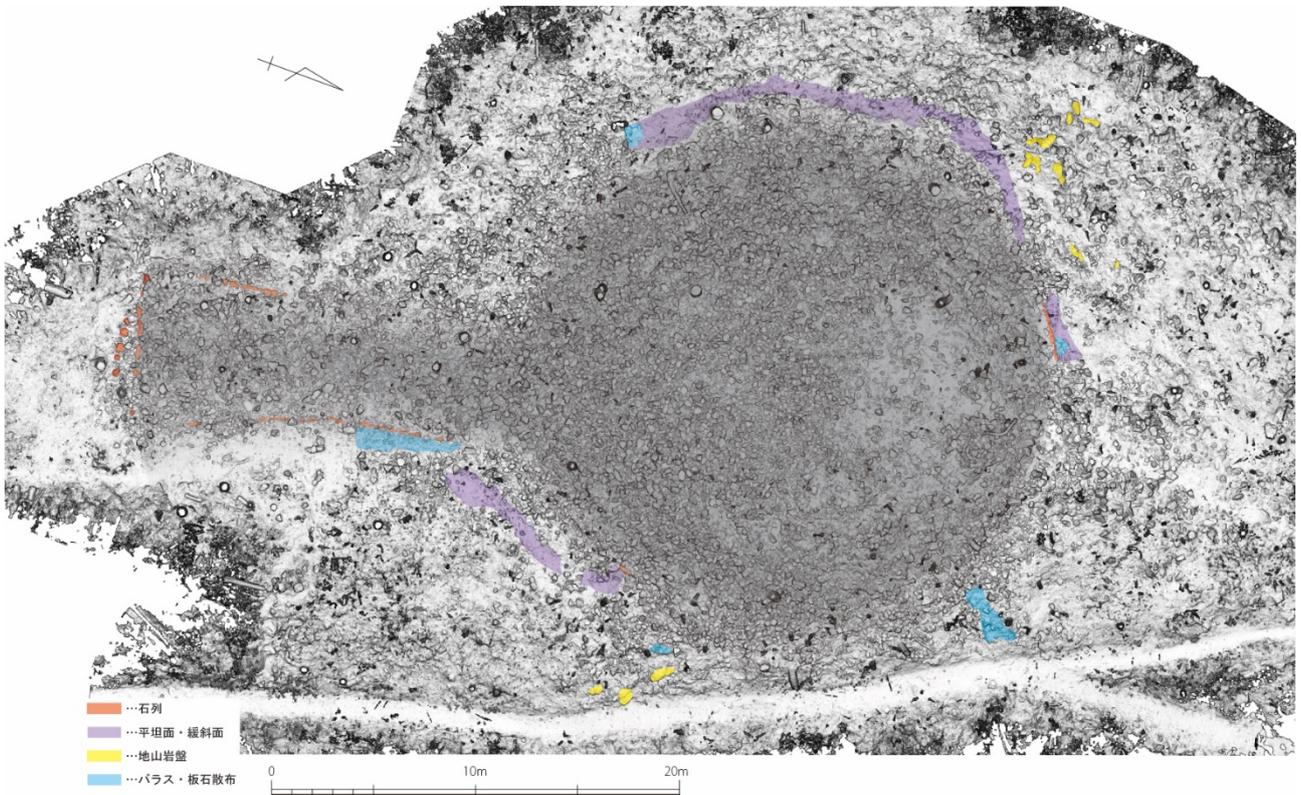


図 24 稲荷山北端 1号墳 陰影図

* 網掛け：墳丘の推定範囲

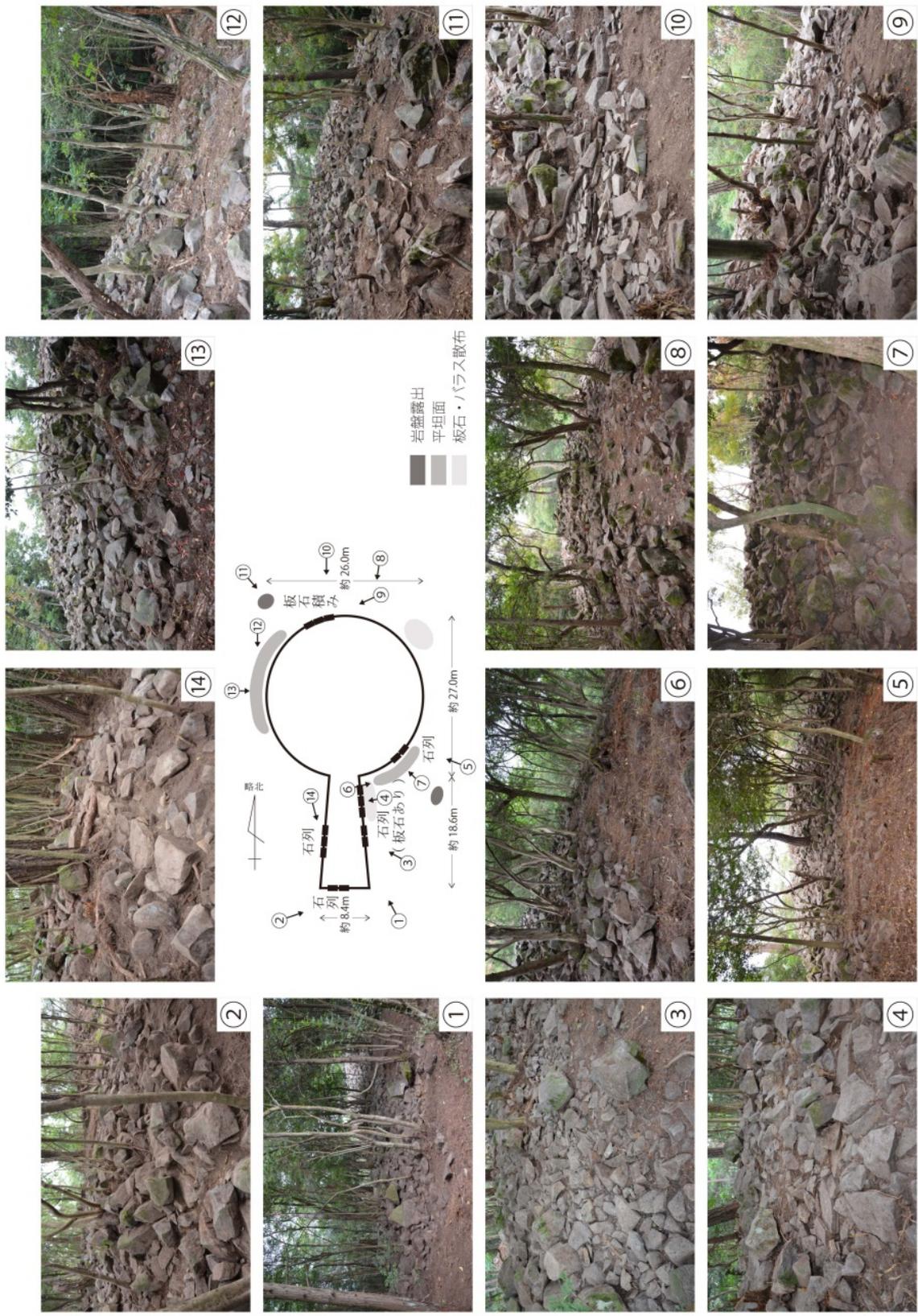


図 25 稲荷山北端 1号墳 各部の状況

b. 調査成果の概要

形状

- ・ 円丘部南側で石列（東・南・西側）を検出し、方丘部であることが確定しました。
- ・ 方丘部の東側の石列は、円丘部側では直線的、南側では東に屈曲して外側に開く形状を呈します。
- ・ 南側の方丘部の南面に、大ぶりの塊石を数石検出しました。方丘部は、円丘部に対して低く立体感に乏しい形状です。
- ・ 円丘部の北側にも地形的な高まりが認められますが、石列などは確認していません。測量図の解析では、南側の方丘部の延長線上から大きく東側にずれることから、北側の高まりが方丘部になる可能性は低いと考えられます。



図 26 稲荷山北端 1 号墳 円丘部北西側
板石積み検出状況（北から）

構造

- ・ 円丘部北西側で塊石の上に板石を 2～3 石程度積み上げた板石積みを検出しました（図 26）。ただし、すぐ西側では塊石が認められ、板石積みは部分的な施工に留まる可能性が考えられます。
- ・ 方丘部東側の石列の一部でも、塊石の上に板石を 2 石積み上げた構造を確認しました。ただし、周辺ではこれ以外に板石積みは認められず、方丘部でも板石積みを施工しますが、部分的な施工に留まる可能性が考えられます。

規模

- ・ 略測値で、円丘部の直径約 27m、南側の方丘部の長さは約 18m、全長は約 45m です。

c. 調査成果のまとめ

稲荷山北端 1 号墳の測量調査から、確定していませんが、現在のところ前方後円墳になる可能性が最も高いと考えられます。仮に前方部を南側に配する前方後円墳であった場合、古墳の全長は約 45 m 程度と推定できます。

最後に稲荷山北端 1 号墳の諸特徴を整理すると、①古墳が丘陵の先端に立地、②立体的な円丘部に対して低平な方丘部、③方丘部前端に大ぶりの塊石が複数石、④方丘部は南側に向けて外側に開く形状、⑤後円部の墳丘で段構造は認められず、元々粗い積み方か、⑥板石積みを円丘部・方丘部のいずれでも施工するが部分的な施工に留まる可能性が高い、以上の特徴が認められます。

これらの特徴は、石清尾山塊に所在する最古級の積石塚前方後円墳である鶴尾神社 4 号墳（図 27・28）・石清尾山 9 号墳（図 29）の特徴と類似します。今回の調査で時期を特定できる遺物は出土しておらず、遺物から古墳の年代を推定することはできませんが、稲荷山北端 1 号墳は最古級の積石塚前方後円墳になる可能性がある古墳と考えられます。その推定が正しければ、稲荷山北端 1 号墳は最古級の積石塚前方後円墳のなかで最大規模の古墳となります（表 1）。

測量調査から多くの情報を得ましたが、まだ明らかにしえない課題も多数あります。今後、より詳細に稲荷山北端 1 号墳の検討を進めていきたいと考えます。

表 1 讃岐地域主要古墳編年表

大久保徹也（編）『讃岐の前期古墳展』展示図録 P 2 の表を引用

		三豊	丸亀平野			高松平野			東部海岸・後背平野					
		南部 弘田川下流域	弘田川中流域	大東川下流域	綾川下流域	大東川・綾川中流域	本津川	石清尾山	香東川	春日川	尾島・新川	鴨部川	津田川・津田湾	湊川
古墳時代前期	前半	西山	丸山2号(15)	丸山2号(15)	白砂(33)	丸山1号(37)	丸山1号(37)	鶴尾神社(4)	空港跡地(403・95)	合子神社(33)	丸井(30)	丸井(30)	丸井(30)	丸井(30)
	新相	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)
	後半	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)
	新相	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)
古墳時代中期	初頭	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)
	前葉	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)
	中葉	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)
	後葉	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)
古墳時代後期	前葉	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)
	中葉	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)
	後葉	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)
飛鳥時代前半	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	丸山(30)	



図 27 鶴尾神社 4号墳 測量図



図 29 石清尾山 9号墳 測量図



図 28 鶴尾神社 4号墳 前方部前端の様子

3 前期連載講座のまとめ

(1) 連載講座の結果

第1回（参加者 120 人）：『石清尾山古墳群の最新調査成果と今後の連載講座の視座』

高上 拓（高松市埋蔵文化財センター）

第2回（参加者 120 人）：『古墳時代のはじまりと吉備－邪馬台国時代の吉備と讃岐－』

安川 満（岡山市埋蔵文化財センター）

第3回（参加者 110 人）：『南河内の古墳と石清尾山古墳群－南河内にみられる積み石状段と円筒形・壺形埴輪との比較－』

河内 一浩（羽曳野市教育委員会）

第4回：10月25日（土）稲荷山姫塚古墳・稲荷山北端1号墳 現地見学会

(2) 連載講座の成果－他地域の古墳との比較検討から－

a. 墳丘構造について

- ・板石の垂直壁を用いて墳丘構築を行う点は、南河内地域の玉手山1号墳・松岳山古墳等に類例がある。
- ・南河内地域の松岳山古墳と茶臼塚古墳は、前方後円墳と近接して方墳が築かれているが、古墳の配置が石清尾山古墳群の北大塚古墳と北大塚東古墳の関係に類似することから、古墳の築造に関しても地域間の交流がうかがわれる。
- ・ただし、石清尾山古墳群の板石積みは現況で墳丘表面（特に外周）で行われる垂直積みであるのに対し、南河内地域の玉手山1号墳では墳丘頂部の方形壇のみ、松岳山古墳では地盤に斜め方向に突き刺すように施工するなど、施工方法はかなり異なっている。
- ・時期的にみて、讃岐地域で板石積みが見られるのは古墳時代前期でも前半に限られる。一方で、南河内地域のものは後出する。
- ・南河内地域でも板石積みを採用している古墳は少数派である。
⇒地域間の交流の結果とみられる。その交流の実態は、程度の強弱や用法の組み換えが示すような、複線的で相互に主体的なものであったと考えられる。

b. 特異な形状の埴輪について

- ・吉備地域・南河内地域ともに稲荷山姫塚古墳で確認した二重口縁を持つ筒形の埴輪は出土しておらず、類例の指摘も困難である。
- ・文様の一部や、特殊壺の可能性のある個体などは、吉備地域との共通性がわずかながら窺えるが、それよりも独自性の方が目立つ。同じ高松平野に所在する高松市茶臼山古墳や船岡山古墳の埴輪との共通点の高さから、讃岐地域、なかでも高松平野における地域的なあり方が強調できる。

Memo

